

斎藤喜博教育思想の基底としての前半生（Ⅰ）

佛教大学大学院教育学研究科 生涯教育専攻 博士後期課程 増田 翼

はじめに

——本研究の基本的立場と方法論——

本稿に始まる一連の研究の目的は、斎藤喜博(1911-1981)の教育思想¹⁾が、その前半生におけるいかなる個人的な基礎経験の上に、またいかなる歴史的、文化的、社会的背景と教育的現実の下に成立したのかという点を了解することにある。このように、彼の教育思想の基底としてその前半生を捉え、教育学的に考察を加えた先行研究は残念ながら存在していない²⁾。そこで今回は、少し迂遠になるが、斎藤の前半生を総合的に捉えるための方法論的基礎を定め、作業の方向性を明確にすることから始めたい。こうすることで、これまでない視座から斎藤の新たな一面を浮き彫りにすることも可能となろう。なお、本稿に始まる斎藤の前半生を捉える一連の研究の構成は、次の通りである。

第1章 斎藤喜博の誕生

——彼を取り巻く風土——（本稿）

第2章 家族からの影響

第3章 子ども期の斎藤喜博

第4章 青年期の斎藤喜博

それではまず、本研究の基本的立場から確認しておこう。我々は、斎藤の前半生を単に事実的に取り上げ説明することを目的としているのではない。むしろ我々の目的は、彼の教育思想の基底としての前半生を解釈学的に理解するこ

とにある。別言すれば、それは、斎藤喜博という一人の教育者の前半生を、彼自身が理解していた以上によりよく理解しようとする試みである。このような試みがいかなるものであるかは、極めて根本的な問題であるから、以下にもう少し詳しくまとめておきたい。

理解するということについて、ボルノー（O. F. Bollnow, 1903-1991）は次のように述べている。「理解するということは、著者自身が語ったことを追遂するだけでは決して満足しえないということであり、そうではなくて、理解者は他者であるがゆえに、また著者自身にとっては自明であったことが理解者にとっては自明でないがゆえに、理解者は、問題となっている表現が生じてきた背景を同時に明らかにしなければならない³⁾」と。つまり、我々が斎藤を理解しようとするとき、彼が語ったこと、述べたことのみを追うのでは全く不十分なのであり、むしろそうして語られたことの背景を捉えなければならないのである。なぜなら、斎藤には自明であったことが、我々には自明でないからである。本研究において、彼の教育思想がその前半生におけるいかなる個人的な基礎経験や種々の歴史的、文化的、社会的背景を基底として生まれたのか、を見極めようとするのはそのためである。けれども、これだけではまだ、斎藤をよりよく理解するということを意味しない。それというのも、よりよく理解すると言った場合、彼においては明言されていないことをも把握す

る必要があるからである。すなわち、それは斎藤における世界観、人間観といったものである。こうした世界観や人間観は、「そこからすべての個々の特徴が由来し、またそこで個々のものが相互に関係しあう統一的中心点を形成する⁴⁾」にもかかわらず、当の本人はそれらを総じて意識することは決してないものである。そのため後からの解釈によって、初めてこれらを浮き彫りにすることが可能となるのである。このことは斎藤（斎藤の精神史）を理解する上で非常に重要な作業となる——当然、斎藤の前半生を辿ると言った場合、こうした世界観や人間観は形成途上にあるため、とりわけその考察に注意を払う必要があろう——。

以上をまとめると、我々は、斎藤を取り巻いていた種々の背景の連関に少しでも内在的に近づき、さらに、彼において自明であったことを超え出て、彼以上に彼を理解しようとする。具体的には、彼の前半生を窺い知ることが可能な作品⁵⁾を手がかりに、その諸連関を内在的に捉え、さらに彼においては明言されていない彼自身の世界観、人間観の解釈にまで歩みを進めることで初めて、彼の教育思想の基底としての前半生を把握することが可能となるのである⁶⁾。

しかし、ここで留意しなければならないことが二つある。一つ目は、斎藤の生における行為、活動、感情や愛、また彼の著作や作品、いかなるものをとっても、決して一つには還元されない成立背景があるということである。あくまでそれらは、多様な成立背景が交差することによって生じた結果なのだから、安易に一つの源流を定め、その因果関係を見出すような方法に陥ってはならない。あくまで、後の解釈によって、その内包する意味（意味連関）や、つらなり（構造連関）が照らし出されるに過ぎないのである。二つ目は、解釈行為そのものには、解釈者自身の前理解が必然的に伴っているということである。そのため自らの解釈地平を自覚す

るとともに、常に考察を完結させずに、テキストと対話し更新し続ける姿勢が求められるであろう。

さて、ここまで斎藤の前半生を解釈学的に理解するという我々の立場を示してきた。ここからは、具体的にどのような方法論的アプローチによって、解釈を進めていくのかを確認したい。何よりここで強調せねばならないことは、斎藤はその前半生において、まさに人間になった——すなわち、人間形成の道を歩んだ——という至極当然の事実である。けれども、ここには人間になるという営みに含まれる種々様々な側面が内含されているので、これらを浮き彫りにできるような視角が要求される。そこで本研究では、上記の面をいくらかでも明瞭にすることが可能な方法として、人間学的アプローチを採択し、考察を深めていきたい。

まず第1章では、彼が生まれ育った土地に存する固有の風土——具体的には、地理的な風土と地理的な条件から生じた文化的風土——について見ていく。我々が、彼の前半生を捉える試みの初めにおいて風土を取り上げるのには理由がある。それというのも、斎藤を含め彼とかかわりのある人々の多くが、こうした風土的基盤の上に生活していた——良く言えば、そうした特殊性（可能性）の中で、悪く言えば、そうした制約（限界）の中で生き抜いていた——ゆえに、斎藤の存在根拠を問うという最も基礎的な作業として風土を明らかにすることは至って当然であるからである。ところで、一般的に、人間存在の在り様をその根底において規定している風土は、一人の人間の生い立ちのあまりに深層を支配しているため、意識化されにくい。けれども、斎藤の場合、彼が歌人でもあったという点に注意する必要がある。なぜなら、彼の短歌の中には、風土を題材にしたものが無数に存在するからである。つまり、表現を通じて彼は、風土そのものについて十分に意識化していたと言

えるのである。こうした歌人斎藤喜博に焦点を当て、その作風と風土との関係理解に努めた研究はこれまでも種々存在する⁷⁾。しかし、これはあくまで歌人の側からのアプローチであって、教育学的、人間学的アプローチではない。当然、こうした先行研究が実りある成果をもたらしているのは間違いないが、あくまで本稿は、彼の教育思想の基底に横たわる風土を見なければならぬ。

ところで、かつて和辻哲郎（1889-1960）は、「風土は人間存在が己れを客体化する契機であるが、ちょうどその点においてまた人間は己れ自身を了解するのである⁸⁾」と語った。このことは、斎藤においても当てはまるのであろうか。結論を先取りすれば、生涯にわたって住み続けた上州の風土において、彼は自己を見つめ、また自己を了解したことに間違いはない。まさに上州に横たわる風土が斎藤喜博を生んだと言っても過言ではないし、風土が彼の教育思想の基底をなしていることも確実なのである。「我々はただに過去を背負うのみならずまた風土をも背負うのである⁹⁾」と和辻は述べたが、まさに斎藤も、生涯にわたって、ひたすら上州風土を背負っていたのである。したがって、後からの解釈によって彼と風土との連関を捉えることは、本研究において必要不可欠な考察となるのである。

次いで第2章では、彼が家族から受けた影響を主に見ていく。おそらく、そこでの考察は、斎藤少年が十分に温かな家族の愛に育まれ、信頼の世界の内に存在し得たこと、さらに、そうした被包感（Geborgenheit）に支えられた結果、周囲の様々な事象に人一倍関心を寄せながら成長し得たこと等が取り上げられるであろう。また、姉姉が教職に就いていたこと、さらに父から教職を勧められたことが、彼の教育者としての歩みの第一歩となった点にも触れておきたい。

さらに進んで第3章、第4章では、子ども期、

青年期という区分を設け、各期における人間学的意味を押さえた上で斎藤を捉えていく¹⁰⁾。その人間学的意味については、各章で詳しく論じるつもりであるが、ここで簡単に触れておくことも作業の方向性を示す意味では有効であろうと思われる。

まず子ども期における人間学的意味についてであるが、例えば、ランゲフェルド（M. J. Langeveld, 1905-1989）は、「人間がまず最初は子供である」という点と、「人間がどのように子供であるか」という点の考察が、それまでの人間学には欠如していたと批判を加えた上で、「世界に対する実際の関係の中で自己自身を解釈する存在、環境の枠組みの中にありながらもなお自分で自分を規定してゆく存在としての人間の一時期〔子ども期〕が理解されなければならない¹¹⁾」と述べた。ランゲフェルドによれば、子どもとは「自分の感情に適合した理解可能な意味を開示している世界の中に生きている」存在であり、他方「純粋に何の制限もない」存在でもある。また、子どもは「人間的に生きるという責任に生産的に参加してゆくような人間となる機会¹²⁾」を求めている。こうしたことのほかにも、これまでの人間学的研究によって、子ども存在の意味については様々に論じられてきた——例えば、子どもの空間と時間、子どもの身体等である——。本研究では、こうした観点（人間の生における子ども期の人間学的意味）を基盤に、子ども期の斎藤を見ていく。別言すれば、それは後の斎藤の子ども観（人間観）の基底を見出す試みである。斎藤の子ども観とは、例えば、「子どもは、もともと、絶えず驚きながら成長し、自分を変化させていっているものである¹³⁾」といったものを指すが、この言葉の背景に、彼自身の子ども期における基礎経験が横たわっていることは間違いなく。以上の詳細には、第3章で再び触れることにする。

他方、青年期における人間学的意味とは何であろうか。例えば、次のように言えるかもしれない。青年とは、種々の責任を引き受けるという「おとならしさ」へ向かう途上にある存在であり、またその途上において自己同一性（アイデンティティ）の確立を目指している存在である¹⁴⁾、と。あるいは、青年期とは、様々な問題に直面する「危機の時代¹⁵⁾」とも言えるであろう。ところで、多くの研究が示唆するように、青年期そのものの定義やその言葉が示す年齢の範囲には揺らぎがある。そのため、ここでは斎藤の青年期がいつごろから始まり、いつごろまでを指すのかといった問いも必要となるだろう。こうした問題は、第4章において検討する。いずれにせよ、ここで特筆すべきことは、我々の研究方法が、心理学において用いられるような、単に発達課題に応じた段階として子ども期や青年期を捉えるような見方ではないということである。人間の生は、そのすべての段階において、そのものとしての価値を有するという点が重要なのであるから、一刻も早く克服すべき段階として子ども期、青年期を捉えるようなことはしない。

さて、折しも我々は、上記のように「危機」といった言葉に触れたわけだが、このような人間の生の個別現象を取り上げ、その人間学的意味を問う作業の重要性を説いたのは、周知のようにボルノーである。我々は、斎藤の前半生を人間学的に解釈するにあたり、ボルノーが『教育学における人間学的見方』の中で提示した四つの原理——とりわけ「人間の生の個別現象に対する人間学的解釈の原理¹⁶⁾」——を大いに参考にしつつ、彼の個人的な基礎経験の意味を問うていきたい。つまり、こうした原理に従い、斎藤の前半生における「危機、覚醒、訓戒、冒険、挫折、出会い¹⁷⁾」等を考察するということである。さらに、ボルノーが言うように、人間は連続的ではなく非連続的に成長するという視

点に基づき¹⁸⁾、例えば、「危機」、「出会い」といった偶然的で非計画的な事象が彼にいかなる頓悟をもたらすかを見ていくことで、彼の前半生をより彩り豊かに捉えることも可能となろう。

かくして、こうした方法論を基盤に、ここからは実際に斎藤の前半生を辿ることにしたい。なお、残念ながら本稿では、紙幅の制約から第1章を考察するに止めるしかない。その先の考察については、稿を改めて行うこととする。

第1章 斎藤喜博の誕生

——彼を取り巻く風土——

斎藤喜博は1911（明治44）年3月20日、群馬県佐波郡芝根村川井（現、群馬県玉村町川井）に生まれた。この地は群馬県南端、赤城山麓の南側に位置し、北を流れる利根川と南を流れる烏川との合流地点にある小農村である。この地の風土において、とりわけ彼に甚大な影響を与え続けたのは、利根川とその川辺の自然であろう。利根川は関東平野を流れる河川の中でも最長、最大流域を有していて（全長は日本第2位、流域面積は日本最大）、その昔から、人々の生活基盤としてだけでなく、物流基盤としても重要な存在であった。また利根川は暴れ川としても名高く、氾濫と流路変更を幾度も繰り返してきた。例えば、斎藤が誕生する約半年前の1910（明治43）年8月に起きた大洪水は、県下で死者、行方不明者合わせて306人を出した大惨事であった¹⁹⁾。このように利根川は、古来から、その流域に実りと災いの両者を与えてきたが、当然、その存在がなければ、そこに生じる文化の涵養も、無数の人間の生活も成り立たなかったのは言うまでもない。いわば、利根川は、この地域の人々にとって母なる川なのである。斎藤は、まさにそうした利根川と、その川辺の自然に浸りきった子どもであった。そこで出会った自然の美しさと、それに対する感動、驚きは

彼の世界観——当然、人間観や教育観も含まれる——の最も基底層に、分厚く澱のように降り積もっている。それらを回想する彼の記述は、どれを取っても表現豊かで、しかも五感すべてを働かせ感受した描写がされている。

ところで、利根川とその川辺の自然は、単に感動や驚きを斎藤にもたらしたのではない。彼は、それらを通じて世界を知り、また世界への想いを膨らませていくのである。例えば、家のすぐ近くを流れる滝川（用水）越しに見た利根川についての記述には、未知の世界へと想いを馳せる斎藤少年の内面が表されている。

川敷からは、夕方になると、何十そうという小舟が白帆を浮べて川をのぼってくるのが毎日見えた。……はじめはるか東のほうに、一つか二つ点々と見えはじめるのだが、そのうちだんだんと近づいてきて、何十そうもの白帆が一列になってのぼってきた。……そういう夢のような景色を、私は川原に立っていつまでもみつづけていた。ときには土橋の上に腰かけてながめていた。何か心がふくらむような思いであり、遠くの世界につれていかれるような気持でもあった²⁰⁾。

周知のようにフレーベル（Friedrich Fröbel, 1782-1852）は、「少年の心情に潜んでいる、予感し、憧れる深い心が、この時期に営まれるあらゆる行動を貫いて」いる、「自分自身にも説明できない憧憬が、かれを駆りたてて、特に自然の事物に、隠れひそんでいる自然界の事物や植物や花などに、向かわせる²¹⁾」と語ること、子どもにとって予感（Ahnung）や憧憬（Sehnsucht）がいかに重要であるかを唱えた。斎藤の場合、利根川や川辺の自然を通じて予感や憧憬を抱くことで、今の自分を超越していく体験を多くしたのではないだろうか。

さて、利根川以外の自然にも少し触れておこ

う。先述の通り、彼の自然描写はそのどれもが、情景をありありと伝えている。

私が生まれ育った家は、藪蔭の小さな麦藁屋根の家だったが、庭には大きな蜜柑の木があった。毎年白い花がいっぱい咲き、さまざまな蜂がむらがって蜜を吸っていた。つぶらな青い実が、日ましに大きくなっていくさまが、幼いものにも、目にしみるような清潔な感じを与えていた。……屋根裏には、青大将という大きなへびが、ねずみをとるためによくのぼっていた。ねずみをとったときなどは、青光りのする大きな腹を出してうねっており、そのうちに大きな音を立てて土間に落ちてきたりすることもあった。……家のすぐ前は広い竹藪だった。……雪がやんでよく晴れた暖かい日になると、倒れた竹がづぎづぎと音をたててはねかえっていった。……そうすると急に家のなかが明るくなり、青い美しい空がぼっかりと見えた。……夕方になるとこの竹藪に夕日がさしこみ、さまざまな色の光が竹藪いっぱいに輝いた²²⁾。

霜柱だけみても美しいが、霜柱のいっばい立っているなかに、太い麦が生き生きと空のほうへ向かってのび出しているのなども美しいと思います。空のよく晴れた風のない朝、こういう景色をみていると、わたくしは身も心も洗われ、目がさめるような感じがいたします。そしてそんなとき、朝日がいっばい輝やいて、その光のなかを、目白のすんだ声が田一面にひろがるのです²³⁾。

斎藤の心の中にはこうした原風景が無数に存在していた。それは、後に教師となり、さらに校長となり周囲と戦い続けなければならなかった斎藤にとっての寄る辺だったのかもしれない。実際彼は、人生に迷い疲れ果てたとき、自然に触れることで自らを奮い立たせた。晩年の

彼は、「私が自然に心をひかれるのは、自然にだけ目を向け、世のなかを逃避していくというのではなくて、むしろ逆に、人間が好きだから、人間というものをよいと思い、人間というものが大事だと思うから」であり、「自然のなかにはいって、自然の摂理とか合理とか美しさとかを学んで、自分の心を充実させ、自分の好きな人間の世界のなかへはいり込んで、そこでよい仕事を少しでもしていきたいという、積極的な気持を持っている²⁴⁾」と語っている。おそらく彼は、自然と触れ合うことで、心の中にある原風景を思い起こし、苦渋の現実を乗り切る糧を獲得していたのであろう²⁵⁾。我々人間は、しばしば、普段対峙すべき世界において自らがどのような態度・姿勢を取り得るべきかを見失ったり、迷ったりすることがある。それは斎藤もまた同様であった。そのようなとき、彼は自然に浸りきるという手段を用いた。風土に身を沈めることで、自己存在の基底を掘り起こし、そこから新たな発見、新たな自己了解をもたらすという手段を用いたのである。そうすることで斎藤は、常に周囲の動きを機敏に察知し対応していくという平衡感覚を見失わず、とりわけ自らの信念を生涯にわたって貫き通すことを可能にしたのである。あるいは、こうも言えよう。自然という偉大で不動の存在に自らを反映させることで、日々無常に変化する自己を理解し新たな明日への指針を獲得した、と。彼は、決して自然を支配しようとはしなかった。それは、子ども期に駆け回った自然への感動と畏怖の念がそうさせたのである。こうした風土の自然との交流を通じて生まれた感覚が、芸術的ともカリスマ的とも言われる後の彼の教育方法につながっていることは間違いない。例えば、斎藤において、「木にのぼったり、枝にぶらさがったり」する「田舎の子どもはみんな感じで知っている」、「どんな子どもも、この先はもうあぶないということを、心で感じるができる²⁶⁾」と

いった表現がなされるのも、五感とともに第六感とも言える感覚を駆使して世界を捉えていたことの証しではなかろうか。他にも、「どこの茅花がちょうど食べごろだとか、どこの桑畑の桑の実が一番うまいとかいって採り歩く」ことが「いつも手足を使い、体を使い、そういう行動を通して、感覚的、視覚的に私たちの感性とか感覚とかをつくりあげて来た²⁷⁾」とも述べている。おとなが用いる社会的時間など気にも留めずに、自然の中をいつまでも、どこまでも走り回っていた斎藤少年は、そうした原体験の中で、様々なことを察知する感覚を身につけていったのである。

ところで、上州の風土を語る際、「空っ風」を外すわけにはいかない。冬にこの風が吹きすさぶのは、上州を囲う山々——川井の地から見える山々（浅間山、妙義山、榛名山、上越の山々、赤城山）の景観は、決して聳え立ってはおらず、西から北にかけて遠くやわらかな稜線を描いている²⁸⁾——に原因がある。すなわち、斎藤の言葉で説明すれば、「上州は、西から北にかけて、びょうぶのような山のつらなりにかこまれてい」るために、「シベリヤのほうからふいてくるつめたい風は、新潟がわに雪をいっぱいふらせたあとは、高い山々のしきりにさえぎられて、かわいたつめたい風だけが、山腹の斜面を、はげしく吹き下ろしてくる²⁹⁾」。これが空っ風と呼ばれるもので、上州気質を昔から形づくってきたものとしてよく語られるのである³⁰⁾。関東平野というのは、その広大で標高の平地のために、風を遮るものがない。そのため、冬になると強い北からの空っ風が一日中吹き続けるのである。斎藤は、こうした空っ風が吹きすさんでいる中でも、めげずに新しいつばみや芽を用意している木々の美しさに感動し、次のように綴っている。

冬の木々にわたくしはいろいろのことを教え

られます。冬の木々の芽を見ていると、どんな不幸にあっても、どんな苦しいことにあっても、くずれおれないで、自分をくずさないで、しっかりとしかも香わしい暖かい生き方をしなければいけないと思います。思い上がってはいけないう、自分だけが偉いと思ってはいけないう、ということも教えられます。わたくしは冬の木々の芽を見ていると、いつも心が楽しく清潔になり、心が明るく暖かくなり、胸のなかに、あたたかさ、強い勇気が、こみあげるようにわいてくるのです³¹⁾。

このように斎藤には、誰からでもなく自然から生きる姿勢を学んだ、ということが数多くある。まさに彼は、人間の生そのものを自然から（風土から）了解し、身に宿していったのである。

さて、ここまで地理的、自然的風土を主に見てきたわけだが、ここからは、文化的風土に触れてみたい。斎藤が誕生した当時、この川井という集落は、斎藤も述べるように、「川と川との間にはさまれた、静かな小さな村³²⁾」、「夜になると……ときどき道を通る人の下駄の音が遠くからきこえてき、また遠ざかっていだけ³³⁾」の、それほど賑わいもなく、田舎の趣を止めているようなところであった。けれども一方で、この地は江戸時代後半より養蚕業で栄え、ひいては日本の近代化を支えた地でもあったのである。とりわけ、18世紀末から19世紀にかけて、絹・生糸の購入のために江戸や京都の商人が数多く上州を往来した。さらに横浜開港（1859年）以来、生糸が最大の輸出貿易品となると、養蚕・製糸・織物業は群馬の基幹産業となり、目覚ましい発展を遂げるのである。これに乗じて、富岡製糸場（1872年）、新町屑糸紡績所（1877年）が設立されたことで、生糸産業の量と質は高められ、まさに群馬の養蚕業が日本の近代化の最前線を邁進していく時代を築いたのである。川井は、利根川を隔てた近郷の島村——ここは、

後の斎藤が校長として赴任する島村小学校が存する地である——とともに、ヨーロッパへの輸出に向けた大規模な蚕種生産が盛んであった。ことさら島村では、全戸を挙げて蚕種生産に従事したという³⁴⁾。両地区で養蚕業が発展した理由の一つに、利根川や烏川の沿岸に位置し、肥沃で水はけが良い土壌と、清涼な日当たり、通風の良い土地に恵まれたことから、蚕の飼育に適する良質な桑が育ったことが挙げられる³⁵⁾。主穀生産以上に蚕糸業の発展が大きかったというから、その規模が想像できよう。斎藤の回想の中にも、たびたび桑に関する思い出が登場する。

繭かきは、子どもや大人が何人も手伝いに行っていたのでにぎやかだった。みんながたわいもない話をしながら、げらげら笑って繭をかいだ。さまざまの世間のことも話に出た。……私はそういう話をききながら、いつもだまって繭かきをしていた。……けれども私は、繭かきがきらいではなかった。美しいころろとした繭がザルのなかにたまっていくのが楽しかった。……人の前では口もきけなかったような無口な子どもだったが、大人たちの話をきいているのが楽しかった。大人のなかで、いたわられながら仕事をしているのが楽しくてならなかった³⁶⁾。

群馬の養蚕業について書かれた本の中には、「上州の特徴ある気質は繭と生糸によって形成されたところが多々あるだろう」という記述も見られる。その本には、冬農閑期になると、女衆が庭先や縁側で出荷できなかった繭の糸取りをし、男衆が子どもを背負って子守りをするといった上州特有の光景が各地で見られたと記されている。糸取りや座繰り、機織りといった繊細な仕事に男衆は不向きとされ、女衆がその担い手として活躍し、その分、発言力も女衆にあっ

たのだという。このことからして、「カカア天下」という上州気質が語られるようになったのである³⁷⁾。次章で詳しく見るが、斎藤喜博の母親も、このような上州気質からか、まさに「カカア天下」であり、父親に対して母親の行動力、判断力の良さが際立っているのは確かである。また、こうした養蚕業文化の一端として、斎藤の長姉が19歳で嫁ぐまで、「家で伊勢崎銘仙の手機を織っていた」こと等も回想されている³⁸⁾。

こうした養蚕の風土に加えて、上州は、江戸に近かったということもあり、様々な文化・学問が流れ込む所であった。江戸時代から、漢学や算術といった学問の発展が著しく、関孝和(1642-1708)を中心とした和算は有名である。そうした中で、斎藤の父方の祖父自身、漢学を教えたり、絵を描いたりしていた。また、群馬は、日本の近代化を支えるような大物を多く輩出した土地としても名高い³⁹⁾。

ついでながら、斎藤誕生前後の群馬の教育にも少し触れておこう。群馬の教育は、明治初期、「西の岡山、東の群馬」と言われるほど、当時の日本では教育の先進県であった⁴⁰⁾。それというのも、1873(明治6)年ごろの群馬県の就学率がわずか30%前後であったのに対し、1876(明治9)年以後飛躍的に伸び、1879(明治12)年には68%と、全国1、2位の高水準となったためである。その主力をなしたのは、1876年~1884年まで群馬県令を務めた楫取素彦(1829-1912)である。彼は、産業の振興とともに教育の普及に力を入れた。地方巡視の際、立ち寄った学校で校名を揮毫したり、開校式・校舎落成式で祝辞を述べたりするなど、自ら率先して教育の充実に努めた。また彼は、幼稚園、小学校、中学校、女学校、医学校の創設を手掛けてもいる。彼のこうした活動が、教育県群馬を生み、さらにはこの後の大正新教育思想の繁栄を支える地盤を築き上げたのである⁴¹⁾。

ところで、文化的風土について見ていくならば、

その一端として、民俗的行事に触れることも重要であろう。斎藤自身も、自らの回想録の中で多くのページを行事に関する記述に割いている。それだけ、彼にとって意味ある行事がたくさんあった——お正月、節分、ひな祭、お盆、村の鎮守の祭、十五夜、婚礼、葬式、義太夫・浪花節といった芸能等——。なかでも彼は、「子どもたちにとって特に重要なのは道祖神だった⁴²⁾」と言う。これは、毎年1月14日に、正月飾りを道祖神の前で燃やすという行事で、その火に当たると風邪にかからない、ハヤリ病にならないといった信仰があった⁴³⁾。とりわけ注目されるのは、この行事の一切の仕事を子どもたちが担ったということである。斎藤は、「この日は子どもたちは、自分たちが中心になって村の行事をやり、大人や小さい子たちの世話をするので嬉しくてならなかった。自分たちが一人前の大人になったような嬉しい気持ちでいるのだった⁴⁴⁾」と綴っている。ほかにも例えば、当時、隣町であった玉村町の祇園祭のことを述べつつ、「一里もある道を、往復とも私は父の肩車に乗って見物にいったのだった。角淵というところの祇園にも行ったが、道の両端の堀に、蒲が太い穂をたくさん出していたのが、くっきりと印象に残っている⁴⁵⁾」と回想している。このように斎藤は、回想において、村の行事を単に説明するのではなく、そこに斎藤少年の喜びや期待を織り交ぜながら文章を綴っている。これらは十分に、行事の有する人間学的意味を教えてくれている。かつてボルノーは、「祭りを、より深い意味において、それが人生に果たす不可欠の機能において、とらえなければならない⁴⁶⁾」と語り、祭りの人間学的意義を強調した。とりわけ、祭りの教育学的意味として、ボルノーが「ひとは、祭りのなかで日常生活を窮屈にしているもろもろの制約から解放され、それを超越したように感ずるとともに、その感情を表現しようと欲する⁴⁷⁾」と語っていることは示唆的である。なぜ

なら、もし子ども期の斎藤が、祭り（行事）において、ボルノーの言うような制約からの解放や、超越感情の表現を体験したとすれば、それが後の教育思想における「行事」観にも結びつくところがあるように思われるからである。

さて、斎藤は1951（昭和26）年、生地である芝根村川井について、「ここを愛し、この風景を好み、この自然の中に生きてきた」と語り、この川井の地の風土の影響が甚大なものであったと自ら回想した。反面その影響は良い面ばかりではなかったらしく、次のようにも語っている。

こういう風土に加わるに、その間私は次から次へと病気にかかり、病弱に終始し、いつも生命の不安に追いつめられていた。……農村につきまとう封建的な気分と、さらに仕事の上でも人と妥協することのできなかつた私は、種々様々のことが細い弱い神経には堪えられないことのみであって、私はいつも落ち着くことはない生活をしていた。そんなことから、生来孤独癖のある私はいよいよ人なかに出ることをきらい、人と口をきくこともなく、仕事に没頭したほかは本を読んだり、一人で山のなかに籠ったりした⁴⁸⁾。

斎藤は、上記のような自ら殻の中に閉じ籠る時期を乗り越えて、次第に封建的社会と対決するようになる。その後の群馬県教職員組合常任執行委員・文化部長時代、島小・境東小・境小学校長時代の斎藤は、まさに封建、抑圧を打破し、ひいては子どもの可能性を引き出すことに奮闘したのである。このように、封建、抑圧という堅い殻を破り高次の世界へと目を向けていく彼の姿勢は、これまで幾度となく述べたように、風土の中で培われたものであろう。つまり、一方で、殻の中に閉じ籠ったのが風土による影響だとすれば、他方、封建、抑圧に対決を挑む

という姿勢もまた、風土によるところが大きいのである。そうした意味からも、やはり斎藤は、風土の中に息づき、風土を背負いながら成長していったのだと言えるのではないだろうか。

おわりに

今回は、斎藤喜博の前半生を辿るための礎石として、その方法論を明示した。また第1章において、斎藤を取り巻く風土を明らかにすることで、彼の思想の根底に流れる風土的基盤を理解しようと努めた。ただし、風土に関する考察の中に、子ども期の考察と認められるものも多く存在してしまっている。このことは、一つに筆者の中での整理不足もあろうが、他方で、それだけ風土が子ども期に与える影響の大きさを物語っているとも言えよう。今回は、できる限り、上州風土と斎藤との結びつきを明らかにするよう心がけた。したがって、第3章では、直接風土とは関係の薄い、子ども期斎藤の出会いや冒険、挫折や苦悩についてまとめたいと考えている。

【註】

*『斎藤喜博全集』からの引用は巻数とページのみ記す。『全集』は全18巻（うち15巻は2分冊、また別巻2巻含む）で、国土社から、1969-1971年に出版された。

- 1) 〈斎藤喜博教育思想〉と言った場合、いつのころの何を指すのか。思想というものが、あるまとまりを有する考えだと定義するならば、斎藤の教育思想と呼べるものが現れるのは処女作『教室愛』（1941年）からであろう。つまり本研究は、〈『教室愛』以降の彼の教育思想〉の基底としての前半生を見ていくことになる。さらに言えば、彼の青年期というものが、成人期へと移行し始めるのも、この『教室愛』が刊行されて以降のことのように思われる。その詳細については、今後の研究で明らかにしたい。
- 2) 彼の前半生に触れた先行文献として、水上正『斎藤喜博の短歌と人間』（国土社、1974年）、笠原肇

- 『評伝 斎藤喜博』（一莖書房、1991年）等が挙げられるが、これらは彼の教育思想の基底としてその前半生を捉え考察していくという方法が、明確に打ち出されたものではない。
- 3) O. F. ボルノー著、西村皓、森田孝監訳『解釈学研究』玉川大学出版部、1991年、65頁。
 - 4) O. F. ボルノー著、岡本英明訳『教育学における人間学的見方』玉川大学出版部、1977年、33頁。
 - 5) 斎藤の前半生について彼自身が書いたまとまった回想録は、「少年のころの記憶」（『全集12』、5-82頁）と、『可能性に生きる』（『全集12』、83頁以降）の2点が挙げられる。「少年のころの記憶」は『全集12』のために書き下ろされたもので、39年間の実践を終えた（1969年3月に校長職から退いた）斎藤の視点から回想されている。他方、郷里の自然を童話の形でまとめた著作に『川ぞいの村』（『全集14』、5-64頁）や『子どもへの物語』（『全集14』、65-141頁）がある。『川ぞいの村』は、斎藤が上梓したいわば子ども風土記であり、彼の子ども期における風土とのかかわりを読み取れるだけでなく、上州風土を理解する上でも十分に価値あるものである。あるいはさらに、彼の短歌の中にも、前半生にまつわるものが多く見出せるであろう。
 - 6) こうした研究の常道に従い、本研究でも書簡を活用したいところであるが、斎藤の場合、数多く存在したであろう書簡のほとんどは公表されていない。土屋文明との間に交わされた書簡の一部が公開されているのみである（塩崎猛雄「斎藤喜博宛土屋文明書簡等について」『風文学紀要』4号、群馬県立土屋文明記念文学館、2000年、13-30頁。あるいは、群馬県立土屋文明記念文学館編『土屋文明と斎藤喜博』、1999年）。そうした数多くの書簡に出会うことができれば、解釈の拠り所も広がり、考察に奥行きが出てくると思われるのであるが、残念ながら、これらの入手は、現段階では不可能に近い。そのため、本研究では、主に彼の自伝的回想記、著作、短歌を第一次資料とし、さらにこれまでの斎藤研究の成果の上に考察を深めていく。
 - 7) 斎藤の生涯、生活面を取り上げ論じたものの多くは、歌人斎藤喜博を追っており、教育学の立場からの研究は乏しいのが現状である。
 - 8) 和辻哲郎『風土』岩波書店、1979年、24頁。
 - 9) 同上、26頁。
 - 10) このような区分が適切であるかは、考察の余地があろう。ここでは、人間の生涯を人間学的に捉えた数々の先行研究に従い、このような区分を設けている。なお本研究では、子ども期の中に、幼年期も含んでいる。こうした点の詳細は、また別稿で論じるつもりである。
 - 11) M. J. ランゲフェルド著、和田修二訳『教育の人間学的考察』改訂版、未来社、1973年、53-56頁。
 - 12) 同上、61-62頁。
 - 13) 『全集7』、79頁。
 - 14) M. J. ランゲフェルド著、岡田渥美、和田修二監訳『続 教育と人間の省察』玉川大学出版部、1976年、115-149頁参照。
 - 15) 和田修二、山崎高哉編『人間の生涯と教育の課題』昭和堂、1988年、133頁。
 - 16) O. F. ボルノー『教育学における人間学的見方』、66-82頁参照。
 - 17) O. F. ボルノー著、峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』理想社、1966年、を参照。
 - 18) ボルノーは、以下のように述べている。「かかる核心は、つねにただ一瞬のうちにのみ実現され、しかもまた、その瞬間とともにふたたび消滅していくもの」、「本来、生活事象の連続性はなく、したがってまた、ひとたび達せられたものを、その瞬間をこえて保持することもない」（O. F. ボルノー著、峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』、18頁）。
 - 19) その年の9月には、群馬県において一府十四県連合共進会——明治政府の殖産興業政策の一環として開催された諸産業の生産物展示会——が予定されていた。8月に起きた大水害による深刻な被害のために共進会の開催すら危ぶまれたが、県民の沈んだ心を回復するためにも、最終的には断固開催が決定された。これらのことは、『群馬の20世紀』（上毛新聞社編、2000年、44頁）や『近代群馬のあゆみ』（群馬県立歴史博物館編、1994年、44-49頁）を参照。
 - 20) 『全集12』、25-26頁。
 - 21) フレーベル著、荒井武訳『人間の教育（上）』岩波書店、1964年、167頁。
 - 22) 『全集12』、7-8頁。
 - 23) 『全集14』、49頁。
 - 24) 『全集10』、358頁。
 - 25) 氷上はその著書『斎藤喜博の短歌と人間』において、1935年から1970年における斎藤の短歌（四歌集『羊歯』、『證』、『職場』、『職場』以後の短歌、合計3032首）の中で使用された動植物の名を集計している。実に様々な語彙が挙げられていることから、利根川とその周辺の自然景が斎藤の原風景として心に刻み込まれていたことは確

- かである（氷上正『斎藤喜博の短歌と人間』、40-45頁）。
- 26) 『全集14』、36頁。
- 27) 斎藤喜博、林竹二『対話 子どもの事実』筑摩書房、1978年、11頁。
- 28) 川井から見渡せる山々の中で、とりわけ斎藤は、赤城山に「親近感を抱いてい」たようである。内田一枝によれば、それは「斎藤の心の支えであり、よりどころであった」。内田は、斎藤が成長するにつれて、赤城山を詠んだ短歌に変化が見られること、また、赤城山という変わらぬものを前に、斎藤の心の有為転変が表現されていることを明らかにしている（『「羊歯」の中の自然詠」、ケノクニ発行所内斎藤喜博研究委員会編『斎藤喜博研究』ケノクニ発行所、1990年、210-232頁参照）。ところで、氷上正は、「この山河〔利根川と赤城山〕は、喜博のふるさとの象徴であり、喜博の歌にみなぎる感情のうねりの根源でもある」（『斎藤喜博の短歌と人間』、11頁）と書き、利根川・赤城山の重要性を強調している。他方、浅間山に関する斎藤の短歌は数こそ多くないものの、噴火を繰り返すその雄姿に重ね合わせてか、心の決断が詠われるようである。彼の短歌には次のものがある。〈かたむきて浅間の煙太く黒くいよいよわれに覚悟あるなり〉。浅間山は、1909（明治42）年、1911年と大噴火を繰り返した。
- 29) 『全集14』、94頁。
- 30) 「上毛かるた」には、「雷と空つ風と義理人情」と書かれた札がある。「上毛かるた」は1947（昭和22）年から発行された郷土かるたのことで、群馬県の子どもたちなら誰もが知っている。現在は、財団法人群馬文化協会が著作権を有している。
- 31) 『全集14』、60頁。
- 32) 『全集12』、7頁。
- 33) 同上、29頁。
- 34) 上毛新聞社編『群馬の20世紀』、4頁に詳しくまとめられている。
- 35) 玉村町誌刊行委員会編『玉村町誌（通史編下巻2）』玉村町誌刊行委員会、1995年、1047頁。
- 36) 『全集12』、62頁。
- 37) 高崎経済大学附属産業研究所編『近代群馬の蚕糸業』日本経済評論社、1999年、321-322頁。
- 38) 『全集12』、16頁。
- 39) 新島謙（1843-1890）は、上州安中藩の江戸屋敷で生まれている。上毛かるたには、「平和の使徒新島襄」と書かれた札がある。また、内村鑑三（1861-1930）は高崎藩の江戸屋敷の生まれ、自然主義文学を唱えた田山花袋（1872-1930）は館林市の生まれである。他方、生誕地ではないものの、澤柳政太郎（1865-1927）は1895（明治28）年2月より、群馬県立尋常中学校（現前橋高校）の校長を務めている。これは、群馬県が中等学校教育の充実と発展を期すために彼を迎えたためである。
- 40) 群馬県は、教育に関して様々に他県と並び称された。例えば、体育教育において「西の鳥取、東の群馬」、勤務評定問題の際は「西の高知、東の群馬」と言われた（群馬県教育史研究懇談会編『風土に根づく』上毛新聞社、1985年、26頁）。斎藤自身も「西の東井（義雄）、東の斎藤」と言われている。
- 41) 群馬県立歴史博物館編『近代群馬のあゆみ』、20-25頁、あるいは、群馬県教育史研究懇談会編『風土に根づく』、26-27頁を参照。
- 42) 『全集12』、34頁。
- 43) 玉村町誌刊行委員会編『玉村町誌（通史編下巻2）』、1238頁にも道祖神についての記述がある。
- 44) 『全集12』、34頁。『風土に根づく』（143頁）には、道祖神では、「カシラを頂点とした上級生から下級生までの集団組織の中で命令、指揮系統が生かされ」、「行事を通じての社会性、自立性、集団性の教育機能がはかられ」と書かれている。
- 45) 『全集12』、10頁。
- 46) O. F. ボルノー著、森昭、岡田渥美共訳『教育を支えるもの』黎明書房、1969年、186頁。
- 47) 同上、191頁。
- 48) 『全集15-2』、68-69頁。群馬の民衆思想についてまとめられた本の中には、「民衆は『物言わぬ民』として位置づけられてきた。……少なくとも、第二次大戦まではそうした風潮が強かった」（高崎経済大学附属産業研究所編『近代群馬の民衆思想』日本経済評論社、2004年、317頁）と書かれているから、やはり、農村につきまとう封建的な雰囲気は相当だったのであろう。